

看護教育におけるCancer Survivorの 「病と共に生きる」体験談からの学生の学び

平野 文子・秋鹿 都子・別所 史恵

概 要

看護教育において看護の対象者についての理解を促進する教育方法として、当事者参加型授業がある。成人看護学「がん看護」においてCancer Survivorによる授業を行い、その授業から学生が何を学んだのかを明らかにし、教育効果を検討した。学生は対象の理解、看護の理解、がんを取りまく社会のあり方、自分自身のあり方、の4領域に関する学びをしていた。がんと共に生きているCancer Survivorの体験談を直接聞くことは、より深くCancer Survivorの内面に接近することにつながり、対象の理解と必要とされる看護を考え、自己のあり方にまで思考を及ぼせる教育効果があった。今後は、これらの学びを活かし、発展させていくことが必要である。

キーワード：Cancer Survivor, 病と共に生きる, 当事者参加型授業, 看護学生

I. はじめに

看護教育において、看護の対象者についての理解を促進するために様々な試みが行われ、いくつかの報告がある(田島他, 1999; 山勢他, 2000; 松村, 2002)。生活習慣病を中心とした慢性疾患患者の看護を中心に教授する成人看護学では、「病と共に生きる」患者を理解するために文献学習を取り入れてきた(平野他, 2001; 馬庭他, 2002)。慢性疾患は症状が軽微であることも多く、療養生活は医療機関を離れた在宅が多い。そのため実際の患者に接する機会も少なく、生活体験が乏しい看護学生は患者を理解しにくい傾向にあると考えたからである。文献学習は、闘病記などが豊富にあることから手軽に取り入れることが可能であり、学生は様々な学びを得ていた。しかし、その学びは選択する文献の影響を受けやすく、文献選択や患者の実践的な取り組みや体験を理解していけるような方法が課題である。

専門教育の中に患者の体験していることについて知る機会を組み入れることの重要性について本研究は、平成17年度本学特別研究費の助成を受けて実施した。

てはKatzがその著書で述べている(Katz, 1993)。日本においては、社会福祉学の立場から当事者による大学での講義に関する報告(久保, 1988)などがあり、「看護学や医療の教育のなかに、こういったことを積極的に取り入れることができないか」と提案している。

そこで、患者の実践的な取り組みや体験を理解し、看護の対象である患者の視点から対象理解を深められることをねらいとして当事者参加型の授業を取り入れることとした。具体的には、生活習慣病の中でも近年慢性疾患として位置づくようになり、また、ネガティブなイメージとして捉えられがちな疾患、がんを体験した者：Cancer Survivor(以下、CSと略す)による「病と共に生きる」をテーマとした授業である。この教育方法による学習内容とその効果を明らかにしようと試みたので報告する。

II. 研究目的

看護の対象についての理解を促進する教育方法として、当事者参加型授業がある。成人看護学「がん看護」においてCSによる授業を行い、その授業から学生が何を学んだのかを明らかにし、教育効果を検討する。

Ⅲ. 研究方法

1. 用語の定義

- 1) 当事者：患者・家族及びその関係者などの看護の対象であり、各々の立場においてニーズを有する者。
- 2) 当事者参加型授業：当事者を学校に招き、通常の授業時間枠の中で行われる当事者の語りを中心とする授業。臨地実習などによる当事者との関わりとは区別する。

2. 当事者参加型授業の実施

1) 当事者参加型授業の位置づけ

成人看護学の2年次開講科目：慢性期あるいは終末期にある成人患者・家族への援助方法論の「がん看護」の単元の最後に特別講義として90分で実施した。

2) 授業の展開

(1) 導入：授業の進め方と講師紹介

(2) 授業：CSによる体験の語り

講師はS状結腸がん切除術の2年後に肝臓への転移を認め、告知、化学療法を経て手術を受けた60歳代の男性。告知から現在に至る葛藤や思いの変化、医療従事者への期待、生命について自らの体験をもとに語った(70分)。

(3) 質疑応答・意見交換

(4) まとめ

3) 参加者

(1) 学生：3年課程看護短期大学2年次生82名

(2) 当事者：S状結腸がん術後患者1名

(3) 授業担当教員2名および学内教職員10名

3. 研究方法

1) 対象：3年課程看護短期大学の成人看護学特別講義「病と共に生きる」に出席し、課題レポートを研究データとして使用することに同意した2年次生80名。

2) 研究期間

2005年3月～2006年8月

3) 調査方法

授業終了後、「特別講義を聞いての学び・意見」(A5サイズ1枚)を学習内容として、自由記載する。レポートの提出は授業終了

後、10日以内とした。

4) 分析方法

内容分析。レポートの記述内容を1文脈単位で看護の対象CSに関する学びを示した部分を抽出し、3名の研究者で意味内容を解釈しコード化した。さらに複数のコードを整理・統合し、カテゴリー化した。

5) 倫理的配慮

本調査を実施するにあたり、大学の研究倫理審査委員会による承認を得た。

学生に対しては、教員が本研究の目的と方法、成績には一切影響しないこと、自由意思に基づく調査であること、結果の公表においても匿名性を確保することなどを文書と口頭で説明した。そして、同意の得られたレポートのみデータとして取り扱った。当事者には、自分の体験を語るに心理的な揺らぎなど侵襲の少ない時間的経過を経た者を選択し、事前に授業の趣旨と方法・内容の詳細を説明し、講師としての承諾を得た。また、語りを対象とした学びを研究データとして使用することのほか、自由意思に基づくものであること、結果の公表においても匿名性を確保することについて文書と口頭で説明した。

Ⅳ. 結果

学生は対象の理解、看護の理解、がんをとりまく社会のあり方、自分自身のあり方の4領域の学びをし、それは13カテゴリー、31サブカテゴリーに分類できた(表1)。以下、カテゴリーは【】で、サブカテゴリーは<>で表す。

1. 対象の理解

対象の理解では、【不安定な心理状況】【心理面に関心を寄せて欲しいという願望】【支えとなるもの】【新たな生き方・価値観の獲得】の4カテゴリーの学びがあった。学生はCSが常に再発の不安や死を間近かに感じながら<再発や死への不安や恐怖を抱えている><心理的に揺れ動いている>こと、そして自分の臓器が提供できないなど<社会からの疎外感>を感じながらも、病と共に人生を歩む<精神的な強さ>を併せ持つという【不安定な心理状況】にある

表1 Cancer Survivorの体験談を聞いた学生の学び

	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
対象の理解	不安定な心理状況	再発や死への不安や恐怖を抱えている	<ul style="list-style-type: none"> 再発への不安などを抱えることでがん患者の心は病んでいる 常に不安や恐怖にさらされているがん患者 身体は一見元気そうに見えても恐怖や不安を抱えている 身体的なものよりも心の苦痛や苦悩が強い 死をいつも意識しながら生きていくことへの辛さ 死を間近に感じ死への恐怖心を抱くがん患者
		心理的に揺れ動いている	<ul style="list-style-type: none"> 揺れ動く心理状況にあるがん患者 発症以後、様々な気持ちの変化があるがん患者
		精神的な強さを持っている	<ul style="list-style-type: none"> 人間ほど強いものはない 苦境にあっても人間はすぐには負けない変化する強さや可能性を秘めている 病を体験しているからこそ生じる精神的な強さと弱さを併せ持つ存在 生きていく強さを持つ患者
		社会からの疎外感を抱いている	<ul style="list-style-type: none"> 臓器を提供できないなど世間からの疎外感を持っているがん患者
	心理面に関心を寄せて欲しいという願望	心で心を聴いて欲しい	<ul style="list-style-type: none"> 言葉ではなく心を見て欲しいと思っている 相手の心をきくということが看護師には求められている 傾聴ではなく、心聴して欲しい
		関心をもち続けて欲しい	<ul style="list-style-type: none"> 病者としての自分に関心をもち続けて欲しいと思っているがん患者 完治と再発の間で揺れ動く気持ちを知って欲しいと思っているがん患者 数年を経た時こそ心のケアを必要としているがん患者
	支えとなるもの	家族を拠り所としている	<ul style="list-style-type: none"> がん患者にとって理解・支えとなる妻の存在 がん患者にとって支えとなる家族の存在 一人だけではなく、周囲の協力・見守りを得ながらがんと戦っている患者
		周囲の理解と協力を支えとしている	<ul style="list-style-type: none"> 病気を通して改めて家族への感謝を感じている患者 病気を通して改めて周囲を思いやる患者像
	新たな生き方・価値観の獲得	思いやりや感謝の気持ちを抱いている	<ul style="list-style-type: none"> がんを人生の経験のひとつと捉えている患者 病をきかけにより自分らしく生きているがん患者 病ときちんと向き合っているがん患者 患者は出来る人：がん、病について勉強しセルフケア出来る人
		病を経験のひとつとして活かしている	
看護の理解	がん患者を理解するために必要な姿勢・態度	心聴する	<ul style="list-style-type: none"> 心で心を聴くことが大切 心聴することは患者の力となれること 患者が真に求める看護が分かるためにも心聴が必要 目には見えない患者の苦悩(思い)を理解するためには心聴が大切 心の声を聴くのが看護師の本当の役目 目には見えない内に秘められた気持ちや感情を汲み取ることが大切 告知後こそ心聴が重要な時である
		真摯に向き合う	<ul style="list-style-type: none"> まず自分が心を開くことが大切 相手の心の声を自分の心で聴くためには本気で接する事が大切 一人ひとりに真摯に向き合うことが大切
		心理状態を踏まえる	<ul style="list-style-type: none"> 患者の不安状況に配慮したケアが大切 心理状態を踏まえて近づいていくことが大切 患者の心理状況、仕草、発言に注目することが重要 がん患者の心理に気付くことが大切
		患者の視点で考える	<ul style="list-style-type: none"> 患者の立場に立って考えることの重要性 患者と同じ目線で接することの大切さ
	がん看護を実践するために必要な自覚・心構え	心にゆとりを持つ	<ul style="list-style-type: none"> 患者としっかり向かい合えるだけの心の余裕と平静さがあることが大切 見守ること、耳を傾けること、それだけで患者は安心できる
		言動に注意・配慮する	<ul style="list-style-type: none"> 看護師の言葉や表情はがん患者の気持ちの持ち様に大きく影響を及ぼす 精一杯頑張っているがん患者への励ましは禁句 看護師の患者に対する言葉への配慮が大切 明るい笑顔で接することが大切 患者に自分がどう映りどう感じられているのかを考えることが大切 患者にとって自分を表現しやすい環境を整えることも大切
		心身両面に目を向ける	<ul style="list-style-type: none"> 外観から元気だとかがんを受容しているとか安易に判断してはいけない 身体的ケアと精神的ケア両方のバランスが大切
	家族ケアの重要性	家族の機能が発揮できるよう支援する	<ul style="list-style-type: none"> 患者の最も傍にいる家族のケアも大切 家族の機能を理解することが大切 家族の力を引き出す関わりが大切
	適切な情報提供	患者が必要とする情報を提供する	<ul style="list-style-type: none"> セカンドオピニオンは患者の希望・支えとなる 告知を望んでいるがん患者
	がんを取り巻く社会のあり方	がん医療をとりまく現状・課題	がんに対する医療・社会的理解の不足
がんの告知の必要性和難しさ			<ul style="list-style-type: none"> 患者の意思を尊重した告知が必要 がんの告知はするべきだ、して欲しい がんの告知を受ける勇気がわいた がんの告知は難しい問題

自分自身のあり方	自己の認識の変化	大切なものへの気づき	・生命の重さと大切さ ・当たり前であることの有難さ、大切さ
		がんと身近なものとして捉える	・がんと人事ではなく自分にも起こりうる病気として捉えていこう ・自分も周りの人も検診を受けなくちゃ ・がんと身近な病気であると感じる
		看護の捉え方の変化	・がん看護はがん患者に関わらずどの様な看護にも通じる ・患者の数だけ看護もある
	看護師として持ち続けたい目標	患者と同じ目線に立てること	・患者と同じ目線に立てる看護者を目指したい
		心のケアが出来ること	・声がけだけでなく、心のケアの出来る看護師になりたい ・心の安心感を与えられる存在になりたい ・心を癒してあげる看護師・人間になりたい
		看護者として模索し続ける	・看護者として自分には何が出来るかを模索しながら取り組む看護者になりたい ・必死に悩み考え続けて生きたい
	看護師としての未熟さの自覚	患者を理解出来ないかもしれない不安	・看護師として働くことの難しさ~やっつけていけるか心配 ・心聴することの難しさ ・がんを経験しなければ分からない
		患者を傷つけるかもしれない不安	・患者にとって嫌な言葉を言ってしまったら、と考えると不安
	ひとりの人間として成長するための目標	人として磨きをかける	・自分の心・感受性を磨いていきたい ・自分らしく生きていきたい
		他者への思いやりをもつ	・心聴は患者のみならず、友人・家族に対しても大切なこと ・普段から他の人を思いやれるよう努力していくことが大切

ことを捉えていた。そのため心の中の深い思いを感じ、聴き取って欲しいと＜心で心を聴いて欲しい＞＜関心を持ち続けて欲しい＞という、医療者に対する【心理面に関心を寄せて欲しいという願望】を持っていると理解してもいた。また、CSは先の見えない不確かな状況にあっても、＜家族を拠り所＞とし、＜周囲の理解と協力＞という【支えとなるもの】を得て、それらに対する＜思いやりや感謝の気持ちを抱き＞ながら、がんと人生の＜経験のひとつとして活かし＞生きていくという、【新たな生き方・価値観の獲得】をしている存在であると捉えていた。

2. 看護の理解

上記のように捉えた対象への看護の理解については、4カテゴリーの学びがあった。【がん患者を理解するために必要な姿勢・態度】として、CSの心の内に秘められた気持ちや感情を汲み取り、心で心の声聴くという＜心聴すること＞こと、＜真摯に向き合う＞ことが大切であるとし、併せてCSの＜心理状態を踏まえる＞、＜患者の視点で考える＞ことが大切であると捉えていた。【がん看護を実践するために必要な自覚・心構え】としては、患者と向かい合えるだけの心の余裕と平静さといった＜心にゆとりを持つ＞、看護師の言動は患者の心理に大きく影響を及ぼし、精一杯頑張っている患者への励ましは禁句などの＜言動に注意する＞や＜心身両面に目を向ける＞ことが大切であると捉えて

いた。また、＜家族の機能が発揮できるよう支援する＞【家族ケアの重要性】や、＜患者が必要とする情報を提供する＞【適切な情報提供】の必要性についても述べていた。

3. がんを取り巻く社会のあり方

がんを取り巻く社会のあり方では、手術後、家庭ではどのようなことに注意したらいいのかの指導がなされず、十分なフォローのない医療やがんということで不利益を被るようながんと言えない社会があることのもどかしさなど＜がんに対する医療・社会的理解の不足＞の側面と、＜がんの告知の必要性と難しさ＞の側面から【がん医療をとりまく現状・課題】を捉えていた。

4. 自分自身のあり方

自分自身のあり方として、【自己の認識の変化】【看護師として持ち続けたい目標】【看護師としての未熟さの自覚】【ひとりの人間として成長するための目標】の4カテゴリーの学びがあった。生命の尊さや当たり前であることの有難さという、＜大切なものへの気づき＞や＜がんと身近なものとして捉える＞こと、がん看護は他のどの様な看護にも通じるなど＜看護の捉え方の変化＞により、学生は【自己の認識の変化】をしていた。また、＜患者と同じ目線に立てること＞＜心のケアが出来ること＞＜看護者として模索し続ける＞という、【看護師として持ち続けたい目標】を掲げていた。一方、がんを経験しなければ患者の深い心理や苦痛の

理解は難しいといったく患者を理解出来ないかもしれない不安>や、自分の何気ない発言が患者にとって嫌な言葉であつたらしく患者を傷つけるかもしれない不安>という、【看護師としての未熟さの自覚】もしていた。そして、感受性を磨いていきたいとく人として磨きをかける>や、普段から友人・家族に対しても思いやれるよう努力をしていくことが大切であるとく他者への思いやりをもつ>【ひとりの人間として成長するための目標】を述べていた。

授業時の学生の反応は、CSの登場からその足腰がしっかりとした姿に目を見張ると共に驚愕の声が上がった。そして、CSの語りの一言も聞き逃すまいと体験談に聞き入っていた。CSの辛い場面を語る目に涙が滲み、声が震える時には、同じく涙する学生も数多くいた。

V. 考 察

以上の結果から、CSの体験談を取り入れた教育効果について考えていく。

一般的に「がん＝死」とイメージしやすい。そのがんと共に生きるCSを目の前にしたことで学生は、足取りも確かで元気な姿に驚きの声を発していた。がんと聞けば、辛い、苦しい、苦悩といったイメージを抱くことが多く、ともすれば床に臥する終末期の像が浮かびやすい(名和, 2003)。学生には医療者の支援なくしては生きられない「弱者」としてのCS像が描かれていたとも言えるだろう。しかし、そのがんと共に生き、今まさに自分らしく生きているCSの存在を目の前にしたことで、その像は取り除かれ、そのCSから力強く語りを直接聞くことは、学生にとって「がん＝死」のイメージの払拭につながったといえる。知識を中心とした講義では伝えきれない、確かなCSという患者の理解に当事者による授業の意義がここにあると考える。

また、CSの語りから、がんを人生の<経験のひとつとして活かし>生きていくという、【新たな生き方・価値観の獲得】をしている存在であると捉えていた。有限の生を必死に生きているCSのエンパワメントの理解にも効果を示しており、これは森川他(2004)の報告にも

同様の効果を認めていた。

そして、生への切なる希望と死への不安・恐怖との間で日々揺れ動いていること、またそのような状況や気持ちを分かって欲しい、察して欲しいという心からの訴えは、学生にとってCSの内面により深く接近することにつながったといえる。中でも、「心で心を聴いてほしい」というCSの発言は、学生に強い衝撃を与え、真の看護のあり方について、探求しつづける動機づけになったと考える。

学生はCSの実体験を通した訴えにより、改めて告知の問題や偏見などの社会的側面について認識していた。そして、入院中だけの関わりにとどまらず、継続的な関わりが求められていることを理解した。また、CSを支える家族に対するケアの重要性にも気づくことが出来ており、がん医療を取り巻く現状や継続的な看護の必要性について、真剣に考える機会とすることが出来ていた。社会的視野に乏しく、自己中心的だと言われる現代気質の学生にとって、当事者の語りは、社会面から当事者としての視点で対象の理解や現実社会の中で生きているCSの抱える課題、対策について深く考える機会を与えることに繋がったといえる。

このように、学生は対象や看護の理解、社会のあり方についての学びを通し、看護師として持ち続けたい目標を見つけることが出来ていた。しかし一方で、死を意識しながら生きている患者と真摯に向き合い、本当に必要とされる看護をするには、自分はいかに未熟であると感じている。この気づきにより、よりよい看護師となるには、知識・技術を身につけるだけでなく、自分自身が人間として内面を深め、成長する必要があることにまで思考を及ぼせることが出来たといえる。死を意識しながら一日、一時間、その瞬間を懸命に生き続け、様々な課題を抱えているCSの姿から、学生は毎日を当たり前で生きている自分に気づき、「看護者であることを学習する自分」と「人間としての自分」への課題の認識に至らせる効果があると考えられる。

今、社会の動きの中で当事者が自分のことは自分で決めるという新しいうねりがある(上野他, 2003)。このように当事者が主体となり、サービスなどを形成する参画型社社会が求めら

れ、その可能性が広がりつつあり、当事者の活動が社会に大きな影響を与えている。看護の対象となる当事者の語りを通して、「生命や人間の尊厳」を肌で感じ取り、看護と関連させた社会やシステム・サービスについての深い理解を可能にする取り組みが必要であると言われている(森川他, 2004)。そのためにも看護学の授業に当事者の声を真摯に聴く授業を位置づけることがその一助になると考えられる。CSによる当事者の声を聴くことは、「がん対策基本法」がCS自身の参加によって成立したという近年の動向からも、看護と関連する法的制度をはじめとする社会の動向や保健医療サービスについての理解と関心を深めることに大きな意味を持つと考えられる。また、がんは死因の第1位であり、ともすれば「がん=死」というイメージで捉えがちであること、国民の2人に1人が罹患し、今後ますます臨床で出会う機会が多くなることから、CSによる当事者参加型授業は必要であると考えられる。

Ⅵ. 本研究の限界と今後の課題

現在、当事者参加型授業の評価については、1科目1回のものであり、今後、この授業を継続してデータを収集していくことが必要である。

また、2年次生の横断的なデータであり、同一学生の縦断的な到達度の変化ではない。その後の学習への影響を明らかにしていくこと、そして、講師として授業に参加したCSへの影響なども含め、当事者参加型授業の効果を多角的に評価しながら対象理解の教育方法の検討を進めることが課題である。

Ⅶ. 結 論

今回、看護の対象である患者の視点から対象理解を深められることをねらいとして当事者参加型の授業を取り入れ、学生の学びとその効果を検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

1)CSが「病と共に生きる」体験を自ら語るという授業から、学生は対象の理解、看護の理解、がんを取りまく社会のあり方、自分自身

のあり方、の4領域に関する学びをしていた。
2)がんと共に生きているCSの体験談を直接聞くことは、より深くCSの内面に接近することにつながり、対象の理解と必要とされる看護を考え、自己のあり方にまで思考を及ぼせる教育効果がある。

文 献

- 平野文子, 馬庭史恵 (2001) : 看護学生の「病と共に生きる」患者の理解—文献学習のレポート分析から—, 第32回日本看護学会論文集 看護教育, 89-40.
- Katz,A.H(1993) : Self-Help in America A Social Movement Perspectives./久保紘章(1997) : セルフヘルプ・グループ, 101, 岩崎学術出版社, 東京.
- 久保紘章(1998) : 自立のための援助論—セルフ・ヘルプ・グループに学ぶ, 153-169, 川島書店, 東京
- 松村三千子, 松浦妙子(2002) : 成人看護学授業における模擬患者体験学習の重要性, 看護教育, 43(2), 128-133.
- 馬庭史恵, 平野文子 (2002) : 看護学生のイメージと慢性疾患患者の理解に文献学習が及ぼす影響, 島根県立看護短期大学紀要, 7, 63-70.
- 森川三郎, 中谷千尋, 伏見正江, 仲沢富枝, 野澤由美, 山下貴美子, 上田康子, 渥美一恵, 藤波久恵(2004) : 「当事者参加授業」の教育成果と概念モデルの検討, 山梨県立大学短期大学部紀要, 10(1), 17-29.
- 名和久子, 磯部英子(2003) : がん患者の話から感じ取った学生の学び, 第34回日本看護学会論文集 看護教育, 49.
- 田島玲子, 大澤美佐恵, 富松保宣 (1999) : 老年看護学における対象理解, 第30回日本看護学会論文集 老年看護, 48-50.
- 上野千鶴子, 中西庄司(2003) : 当事者主権, 岩波新書, 2-5, 東京
- 山勢善江, 緒方久美子, 大塚邦子(2000) : 障害者の手記を用いた対象理解に関する研究2—理論を用いた障害受容段階の分析—, 日本看護学教育学会誌, 10(2), 80.

看護教育におけるCancer Survivor の「病と共に生きる」体験談からの学生の学び

Nursing Student's Learning from Cancer Survivor's Story of "Live with Illness"

Fumiko HIRANO, Satoko AIKA and Fumie BESSHO

Key Words and Phrases: nursing students, cancer survivor, lessons with active participation, live with illness

